

「ごめんなさいが言えなくて」

—初稿—

2025/4/8

作者名 さいの

へ人物表へ

林田一成	(24)	丸バツ商事に勤める会社員
五十嵐佳織	(25)	林田と同期入社と同僚
山岸亮	(23)	林田と同期入社と同僚
早川咲希	(24)	林田と同期入社と同僚

1.

丸バツ商事オフィス・給湯室（昼）

こぢんまりとしたオフィスの隅にある給湯室。

林田一成（24）がボケっとした顔で立っている。

目線の先には電子レンジ。中で弁当箱が回っている。

給湯室に入ってくる人影。林田が振り向くと、五十

嵐佳織（25）が弁当箱片手に立っている。

林田、佳織に驚く。佳織、目をそらす。

林田 「あ、今使って……」

佳織、踵を返して立ち去る。

林田、固まる。レンジの電子音。

2.

焼き鳥居酒屋（夜）

賑やかな店内の一角にある四人がけテーブル席。

テーブルの上には食べ終わった皿や空のジョッキ。

山岸亮（23）と早川咲希（24）が並んで座っている。向かいに座る林田に向かって、

山岸 「キャラメル、マキアート？」

咲希 「あの、スタバの？」

林田、俯き加減でじっと座っている。

林田 「いやタリーズの。アイスの、トールサイズ」

咲希 「スタバにもトールサイズあるでしょうが」

山岸 「えっと、なんの話だったっけ？」

咲希 「先週から佳織に避けられてるって話」

山岸 「だよね」

林田、訴えかけるような目線で、

林田 「これ本当に偶然なんだけど、佳織ちゃんも全く同じやつを買って来てたの。で、席隣だったし」

咲希 「ああ、会社の前のタリーズか」

林田 「わざとじゃ無いんだよ。すぐ隣に置いてたから、どっちか分かんなくなってる」

山岸 「いや分かったけどさ、人の飲み物間違ってるって飲んだくらいで、無視される？」

咲希 「謝ったらしい話だよね」

山岸 「うん。一回奢ってあげたりすればね」

咲希 「え、謝ったんでしょ」

林田、顔を逸らす。もじもじして、

林田 「俺、謝るのってなんか、苦手でさ」

咲希・山岸「は？」

と、茫然顔の二人。

3.

クラブ・バーカウンター（夜）

カウンターに座るへべれけな三人。陽気な音楽。

咲希 「ごめんなさいって言うだけでしょうが」

林田 「タイミング分かんなくて」

咲希 「すぐ言うの。気づいた時にすぐ」

と、カウンターのベルを三回鳴らす。

林田 「言わなきゃ気付かないかなとか思ったら、言えなくなっちゃって。でも多分、気付いててさ」

咲希 「ああもう、ウジウジすんな」

店員、人数分のショットグラスを持ってくる。

飲み干す三人。山岸、テーブルに突っ伏す。

咲希 「黙ってんのが一番キモいからね。間接キスして知らんぷりって、超ヤバイやつじゃん」

林田 「うん。毎日、気まずい」

咲希 「自業自得だから。さっさと謝れっての」

と、山岸を叩く。山岸、フラフラと起き上がる。

林田 「でも、避けられてるから」

咲希 「（林田に呆れて）お膳立てしてあげよっか」

林田 「え？」

咲希 「また同期四人で遊びたいじゃん」

と、カウンターのベルを三回鳴らす。

山岸 「……もう、飲めないって」

4.

林田の自宅マンション（朝）

ベッドの上の林田、目が覚め、はっと起き上がる。

急いでスマホの時計を見て安堵。込み上げる吐き気。

通知音。スマホ画面には咲希からのメッセージ。

「十一時に第三会議室」の文面。

六畳くらいの手狭な会議室。

林田、落ち着かない様子で座っている。

机の上にはタリーズの紙袋。扉が開く音。

林田、反射的に顔を机に突っ伏して固まる。

佳織が半開きのドアから中を覗き込んでいる。紙袋の影に頭が隠れたままの林田を見て、怪訝な表情。

佳織、誰だか分からないまま部屋に入ってくる。

佳織 「あの」

林田 「……」

佳織 「ここ、十一時から予約してたと思うんですけど」

林田、佳織から視線を逸らしたまま、顔を上げる。

林田 「ごめんなさい」

佳織、林田に気づいて驚く。

林田、思い出したように紙袋を持ちあげて、

林田 「これ、お詫びに。飲んで」

林田、そっと佳織の方を向く。佳織、困惑顔。

林田 「本当はすぐに謝ればよかったんだけど。なんかあの時焦っちゃったっていうか……」

佳織 「は？」

林田 「だから、この前キャラメルマキアート勝手に飲んで、ごめんなさい。でも、わざとじゃなくて」

佳織 「（思い出したように）ああ」

林田、紙袋を持つ手を下げて、困惑顔。

佳織 「私、そういうの気にしないタイプだから大丈夫」

林田、驚く。

佳織 「私も間違えて林田くんのやつ飲んだし」

林田 「え？」

佳織 「うん」

林田 「じゃあ、なんで、避けられてんの？」

佳織 「……覚えてない？」

林田 「何を？」

佳織 「っていうか、酒くさ」

佳織、鼻を抑える。

焼き鳥居酒屋（夜）

林田 「あ、ごめん」
 佳織 「もしかして、飲んだら忘れるタイプ？」
 林田 「どういこと？」
 佳織 「私、全部覚えてるタイプ」
 佳織、林田に深々と頭を下げる。
 佳織 「あの、この前は、ごめんなさい」
 林田、驚く。

賑やかな店内の一角にある四人がけテーブル席。
 咲希、スマホのカメラロールをスクロールしている。
 画面には、クラブでの林田と佳織の写真。手を取り
 合って踊っていたり、ハグしていたり、佳織が林田
 の頬にキスをしていたり。

咲希 「いや、写真撮ったことすら忘れてたわ」
 山岸、咲希の隣に座って画面を見ていて、
 「言われてみれば、確かにあの日は激しかった」
 咲希 「うん。こりゃ、すごいね」

咲希と山岸、画面スクロールしては、黄色い声。
 林田と佳織、真っ赤な顔で向かいに座っている。
 山岸 「佳織ちゃんがチリンチリン鳴らしまくってたのは
 覚えてんだけどな」

咲希 「まさかこうなってたとはね」
 咲希と山岸、スクロールする手が止まらない。
 佳織 「（林田に）ごめん。気を付けるわ」
 林田 「大丈夫。佳織ちゃん以外、覚えてないから」
 佳織、頭を抱えて、

佳織 「私も忘れるタイプが良かった……」
 咲希 「ダメだよ。誰か覚えてた方が後々楽しいんだから」
 山岸 「記憶係だ」
 佳織 「覚えてるから今恥ずかしいんだよ」
 咲希 「（スマホを見て）えー楽しそうだけどな」
 林田、佳織の方を向いて、

林田 「あのさ、俺も結構強い方だと思っただけど」

佳織 「うん？」
林田 「この日ってショット何杯でこうなったの」
佳織 「えーっと」

7. クラブ・バーカウンター（夜）

カウンターに座っている四人。

林田と佳織、ショットグラスを飲み干している。

山岸、その隣で机に突っ伏している。

咲希、やかましい音楽に負けじと声を張って、

咲希 「はいこれで十五」

山岸 「……もう、飲めないって」

佳織 「もうみんな、記憶無いんじゃないの？」

林田 「まだ全然あるわ」

佳織 「あっそう」

と、カウンターのベルを四回鳴らす。

咲希 「行くねー」

フロアの方から歓声上がり、振り向く三人。

フロアで踊っている人々の姿。

林田 「踊る？」

佳織 「踊れんの？」

林田 「踊ってたんでしょ。覚えてないけど」

佳織 「あれを踊りとは言わないよ」

林田、佳織の手を取ってフロアに駆け出す。

咲希、呆気にとられる。

フロアの二人、笑顔で咲希に手を振る。

咲希、手を振り返す。

店員、ショットグラスを四つカウンターに置く。

咲希、一つ取って口に運ぶが、手を止めて、

咲希 「今夜は、覚えておいた方がいいかもよ」

と、二人を見たまま、山岸の肩を叩く。

フロアで踊っている笑顔の二人。

終わり。